

【公式ガイドブック】

令和4年度 体育科学シンポジウム 「体育のフヘン性を問う」

主 催：筑波大学体育専門学群

形 式：オンライン開催（Zoom）

参加費：無料

-Concept-

本授業では、体育・スポーツ・健康科学領域における最新のトピックについて、大学内外から専門家をお招きし、シンポジウムを展開する。本シンポジウムを通して、体育・スポーツ・健康科学への関心を高めるとともに、これらの知見を自身の競技生活や指導活動、社会全体にどう生かしていくべきかを考えてもらいたい。

私たちが生きる現代社会は「スピード社会」という言葉で表され、急速な技術革新などによって生活の様々な場面で変化が生じている。また新型コロナウイルス感染症の拡大によって、これまでの生活様式も大きく変化した。このような時代において、私たちが専門とする体育という分野にも多くの場面で変化が求められていることを実感する。しかし、時代に適応し変化を追求することのみが体育の進むべき道なのであろうか。体育の「フヘン的」な価値についても考えていく必要があるのではないだろうか。

そこで今年度のシンポジウムでは「体育のフヘン性を問う」と題し、“スポーツの数値化”、“キャリア形成”、“運動部活動”、“体育の価値”の4つの観点に焦点をあてて議論を行う。本シンポジウムが、これからの体育・スポーツを担う若者の一助となれば幸いである。

企画・運営：筑波大学博士後期課程体育科学学位プログラム

中園優作 坂上輝将 酒井佑 岸井貴春

柳東弦 金載祐 筒井雄大

筑波大学博士前期課程体育学学位プログラム

高桑啓樹 池田美里 福井陽香

令和4年度 体育科学シンポジウム

第1回 スポーツにおいて数値化を進めていくことは Good or Bad?

期 日：2023年1月18日 12:15~15:00

座 長：金 載祐

シンポジスト：本間 三和子 氏 (筑波大学体育系教授)

小井土 正亮 氏 (筑波大学体育系助教)

仲澤 翔大 氏 (筑波大学体育系特任助教)

概 要

2022年に開催されたFIFAワールドカップカタール大会では、半自動オフサイド技術が導入され、これが話題を呼んだ。この技術は、本大会の開幕戦から適用され、決まったかに思われた大会初ゴールはお預けとなった。テクノロジーの発展に伴い、このような審判を補助するシステムも発展し、より正確な判定がもたらされるようになっている。また、テクノロジーの発展は、スポーツにおけるあらゆる事象の数値化にも寄与している。実際、最近のスポーツ中継を見ていると、さまざまなデータを視聴者は得ることができる。さらに、このような数値化されたデータは、選手のプレーやチームの戦術にも応用され、よりレベルの高い競技パフォーマンスの発揮に貢献している。

一方で、数値化されたデータが実際のプレーに応用されていくことによって、選手のプレーが機械化していく可能性があることが懸念されている。また、アーティスティックスイミングのような芸術性を競う種目において、テクノロジーを導入することや数値化を進めていくことは、競技の特性を損なうことにならないだろうか。そこで今回は、現場でデータを用いる指導者、データ分析者、芸術系競技といった観点からスポーツの数値化ということについて考えていきたい。

令和4年度 体育科学シンポジウム

第2回 我々の将来を考える－スポーツから何を学ぶのか－

期 日：2023年1月25日 12:15~15:00

座 長：柳 東弦

シンポジスト：山口 香 氏（筑波大学体育系 教授）

山田 晋三 氏

（筑波大学アスレチックデパートメント

副アスレチックディレクター）

羽生 直剛 氏

（株式会社 Ambition22 代表取締役）

概 要

スポーツ界の発展に一助する役割を担っている我々は、スポーツを続ける中で将来への不安を感じる人も多くいるだろう。例えば、現在社会においてスポーツ実践者の活躍できる場が限定的であること、学生アスリートの引退後の経済的な問題や就職先が少ないこと、スポーツ以外の経験が多くないことなどが挙げられる。このような将来への不安感を軽減するカギは「キャリア形成」にある。社会に出れば、自分の専門分野以外のスキルを求められることも多い。その状況下でスポーツを行う我々の将来を考えるためには、まず「スポーツから何を学ぶのか」について再認識し、そこからキャリア形成に向けた課題を探っていく必要がある。

そこで、本シンポジウムでは、「スポーツを通して何を学び、どのように生かし、自分のキャリアに結び付けていくことができるのか」について議論する。

令和4年度 体育科学シンポジウム

第3回 日本の運動部活動における「伝統」と「未来」を考える

期 日：2023年2月1日 12:15~15:00

座 長：筒井 雄大

シンポジスト：林田 敏裕 氏（筑波大学体育系 特任助教）

沖村 瑠璃 氏（筑波大学陸上競技部 OB・OG 会幹事）

木塚 宙敬 氏（筑波大学大学院）

概 要

日本における運動部活動では、「伝統」という言葉をよく耳にする。伝統は、先輩から後輩へ、卒業生から現役生へと受け継がれていく。指導者は、自身がOB/OGであるならば伝統の伝達者になるが、そうでない場合はむしろ厄介者のように見られることもある。また、これは部員たちの誇りになっている場合もあれば、それに縛られ、従わなければならない規律のようなものとして受け取られる場合もある。

しかし、この数年間において、運動部活動の事態は急転している。新型コロナウイルスの感染拡大によってほとんどのスポーツの機能が停止した。スポーツの長い歴史から見れば、この2年間はほんのわずかなイレギュラーに過ぎないのかもしれない。しかし、そのイレギュラーは運動部活動にとって伝統の断絶を意味し得る程の影響力を有していた。例えば、以前の大会応援や合宿等を経験しているのは、もうすぐ引退する4年生しかおらず、引継ぎに苦労するという声をよく聞く。

なかには伝統を捨て去り革新を求める大学もあるが、はたして伝統は悪習なのであるか。伝統では、過去に学ぶことはできないのだろうか。日本の運動部活動の伝統は未来を導くのだろうか。これらの問いを踏まえて、運動部活動研究者の立場、運動部活動における先輩・後輩という立場から日本の運動部活動のこれから、すなわち「未来」を考えていく。

令和4年度 体育科学シンポジウム

第4回 体育を考え直す -体育とスポーツの異同-

期 日：2023年2月8日 12:15~15:00

座 長：岸井 貴春

シンポジスト：宮崎 明世 氏（筑波大学 准教授）

内山 治樹 氏（筑波大学 教授）

阿江 通良 氏（日本体育大学 特別招聘教授）

（筑波大学 名誉教授）

概 要

まず、体育専門学群生に問いたい。あなたはなぜ、何を求めて筑波大学の体育専門学群に入学したのか。そしてコートに汗を垂らし机に書物を広げ、体育に取り組んできた1年を経たいま、改めて考えてほしい。何を身につけて卒業したいのか、どのような未来を思い描いているか。アスリート、コーチ、教師、研究者として活躍する姿、あるいは他の仕事に就き休日に子供と一緒にスポーツをしている姿かもしれない。体育でできることは幅広いが、だからこそ何が体育なのかわかりにくくなってしまっていることもあるだろう。

ところで、世間では「体育」という言葉よりも「スポーツ」という言葉が多く使われるようになってきている。体育の日や国民体育大会、日本体育協会、これらの「体育」は「スポーツ」へ置き換えられた。大学でも「スポーツ科学部」の存在をよく目にするようになったであろう。はたして、我々が体育と呼んでいたものはすべてスポーツに読み替えても問題ないのだろうか。では、体育専門学群はスポーツ専門学群と呼んでもよいのだろうか。

そこで、本シンポジウムでは、あらためて体育とは何か、体育を学ぶ/教えるとはどういうことなのか問い直したい。それぞれコーチング、学校体育、バイオメカニクスを専門とする先生をお呼びし、体育と体育に似た概念とを比較しながら、それぞれの特徴を整理しディスカッションする。そして、体育・スポーツの分野とそこにいる学生の未来を展望したい。